

# 岐路に立つ大分県由布院

——市町村合併がもたらした「問題」と社会関係の変容——

名古屋大学 石橋康正

## 1 目的

九州・大分県に所在する由布院温泉は、拡大志向・遊興志向が当たり前だった高度成長期から、地元の旅館経営者らが中心となって緑・静けさ・空間を大切にすまちづくりに取り組み、辻馬車の導入、国際映画祭や牛喰い絶叫大会などユニークなイベントの開催など、試行錯誤を繰り返しながら、「みんなが行きたくなる」温泉地としての地歩を固めてきた。90年代には年間入込客数が400万人を突破し、さまざまな人気温泉地ランキングでも上位に選ばれるようになる。大規模開発によらない「成功」は、研究者だけでなく行政やまちづくり関係者など、多くの人々から注目されている。

しかし由布院は、「成功」したがゆえに、いくつかの問題を抱えることとなる。これらの問題は、緑・静けさ・空間を大切にすまちづくりの持続を阻害する要因となりうる。第一報告につづく本報告の目的は、大分県湯布院で起こった市町村合併問題を事例として、温泉観光地のまちづくりの「成功」が他方で様々な問題をもたらすというパラドキシカルな状況を解明することである。2000年代初頭に旧湯布院町に持ち上がった市町村合併案とその後の議論を事例として、地元観光業らによる反対運動の過程の分析から明らかになった「問題」について論じる。

## 2 方法

そこで本報告では第一に、なぜ旧湯布院町は合併を阻止することができなかったのか、そして第二に、由布市の発足後、由布院温泉のまちづくり活動および地域社会における社会関係がいかに変容したのかという点に着目する。データとしては3度の現地調査（2012年12～3月）で収集した各種の資料、行政・旅館経営者・観光協会・旅館組合等への聞き取り調査から得られたものを用いる。

## 3 結果

市町村合併問題は、地域社会に新たな問題を生んだのではなく、成功の影に埋もれてきた部分が一気に表面化する形で「問題」をもたらした。旧湯布院町全体を巻き込み激しい対立・運動へと発展した市町村合併議論は、結果的に反対派の新町長候補擁立の失敗によって決着がついた。この敗因の1つとして、まちづくりのリーダー層から政治リーダーを輩出できなかったことが挙げられた。第1世代リーダーによるまちづくり活動は、もちろん行政との連携関係を抜きにはなし得なかったことである。しかしそれによる「成功」は他の問題を背景化させ、これが結果的に行政や政治との関係構築を停滞させたとみられる。

しかし合併から現在までの状況に目を転じてみると、町長のリコールまで発展した合併問題の後でも地域内に決定的な亀裂が生じていないことも着目すべき点である。これは観光グループのなかで、2000年以降徐々に世代交代が進められていたことと関連していると考えられる。今回聞き取りを行った対象のうち、現観光協会長や協会事務局長、行政職員ら第2世代の担い手は、市として由布院観光をどのように発展させていくかに目を向けている。第1世代が取り組んできたまちづくり活動は、行政との関係や政治的な場への人材輩出は看過してきたものの、次世代の担い手を育ててきたことも確かである。その意味で現在の由布院温泉は、これまで十分とはいえ、合併問題の過程で壊れた社会関係が、今後、まちづくりの担い手の世代交代を経てどのように展開していくかという点でも岐路を迎えている。

※第一報告および本報告は、名古屋大学グローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」の研究成果の一部である。